ロータリーあれこれ

付;ロータリー運動とは

齊　藤　　博

本日はロータリー情報研究会の演者としてお招き戴き誠に有り難うございました。

そこで過去の歴史を紐解いてロータリー運動の現状を正しく認識し、未来に連動してゆく、其の為にも、ロータリー運動とはなんぞや、このロータリーの基本となるべき原理的原点を再確認することも大事なことと存じます。本日はこの点を主題にして、少々申し述べさせて戴きたいと思うのであります。

私たちは平素無造作にロータリーと言う言葉をロータリアンまたロータリーの例会、クラブ、国際ロータリーの意味で用いる事がありますが、先人達が使って来たロータリーと言う言葉の本来の意味は「思想」を意味するものであったようでございます。

その明文上の根拠は、1923 年のセントルイスの国際大会において採択された決議第 23-34 号、その第一項に「ロータリーとは、利己的な欲求と他人のために奉仕したいという感情との間に存在する矛盾の調和を目的とする、人生の哲学である」このようにロータリーとは哲学であると（2010 年手続要覧 p114）明言しているのでありまして、20 世紀初頭の先人たちはロータリーを、思想の次元において捉えていたことは明らかであります。

このロータリーを理解する為には、いろいろな角度からのアプローチが必要でありますが、今回はロータリーの歴史の観点より申し述べたいと存じます。

1）　原始ロータリー論

1905 年、創立直後のロータリーの中心概念は相互扶助、彼らが只管こだわり続けた行動は、職業上の助け合いでありました。　ポール・ハリスはこれを　”you scratch my back”　お前が私の背中を掻くならば、私もお前の背中を掻こうとこの様に評しております。シカゴ・クラブのロータリアン達は資本制社会の基本である自由競争から起こる処の商人達の疑心暗鬼の気持から、些かでも解放されるために、会員から同業者を排除致しました。その結果少数の例外を除いては会員の企業は発展し、経済的にも恵まれるようになりまして、貧乏商人の出世物語りであったのでございます。彼らにはこの時点では未だ「奉仕」という概念に、心傾ける事はなかったのです。

しかし初期のロータリー運動にあってこの原始ロータリー論は、そう長くは続きませんでした。その理由の一つは、同業者を排除した為に、大多数の職業人は、よしんば入会を望んでも、入ることは許されない。たまたま入会を認められた少数の会員だけが相互扶助の利益を受けまして、大多数の職業人は世の荒波に捨て置かれたのですから、当然の事ロータリー・クラブは一部職業人によるエゴイズムの団体であるとの批判を受けました。そこでポール・ハリスは、
「我ら少数の職業人の親睦のエネルギーを、挙げて世の為人の為に放流しよう」と宣言する。時に 1907 年、クラブ結成から 2 年後の事で、初期ロータリーにおける奉仕の概念が朧げながら誕生しました。

こうして 1905 年、親睦を目的として始まった原始ロータリーを元として、以来 106 年の歳月を閲し滔々と流れる大河の如く、今日に至るまでロータリー思想の潮流にも二筋の大きな流れがあったのでございます。

2）「奉仕」Service　concept の誕生と「利己と利他との調和」論

その一つは、1908 年シカゴクラブに入会したフレデリック・シェルドン（Frederick Sheldon）によって提唱された実業倫理的な思想であります。

シェルドンはもともとミシガン大学経済学部卒の秀才で、シカゴの町で販売学を教える学校を設立しまして、その資格でシカゴ・クラブに入会が認められたの

でした。彼は、ロータリー運動が漠然とではありましたが意識し始めた対社会的な目的に、ミシガン学派の理論、つまり「奉仕の哲学」と言う文化概念を結び付けることに成功したのであります。

シェルドンの説くところによれば、商人は利潤無くして自己の事業を成り立たせることは出来ない。しかし利潤獲得に名を借りて、儲けの為なら手段を選ばないと言う事になれば、社会が如何に醜いものになるかは誰でも分かる事である。そこで、ミシガン大学で学んだ「利己と利他との調和」こそ、商人と顧客との問の関係を規律すべき大原則でなくてはならない。この時商人も利益を得て、同時に顧客もまた、物心両面の幸せを得る事が出来る。そして利己と利他との調和せしむる心の場、境地、これをを「奉仕」と呼んだのですが、この「奉仕の心；ideal of service」の会得こそが、商取引には肝要な事なのである。この奉仕の哲学を学び、これを日常生活において実践するとき、自己の努力の結果である利潤に支えられ、なお且つ地域社会から尊敬と信頼を受け、誇りをもって商的文化伝統を、後世に伝えることが出来るものと考えたのでありました。そして、シカゴ・クラブの「親睦」こそ、奉仕の心の会得を可能ならしめる場であるとしました。

このようにして、もともとミシガン大学経済学部において開発された「奉仕」と言う学理的、文化的概念がシェルドンと共にロータリーの世界に導入されたのであります。そういう訳で今日、ロータリアンが漠然と「奉仕」と言う概念を、他者に対する善意や或いは思いやり、弱者の対する慈善行為等々と推察しがちでありますが、そのこと自体は「当たらずとも遠からず」なのですが、より厳密に言えば、ロータリーの「奉仕」とは、シェルドンの説く「利己と利他との調和」の事を言うのだと言うことを、よく心に銘記しておかなければならないのであります。

シェルドンは 1921 年 6 月 14 日にスコットランドのエジンバラで、 今日の国際大会の前身である国際ロータリークラブ連合会第 10 回大会が開かれたときに、全世界の指導的ロータリアンの前で、「Philosophy of Rotary ロータリーと言うのはどう言う思考形態をもった哲学なのか」を体系的に話をしました。

要約しますと、シェルドンの哲学は人間関係論的哲学でありまして、「人間の意志をもって、自然の摂理の方に近付いて行こうではないか。人間各人の肉体の背後に魂がある。死に至るまで自然との接触だとか、人間関係を通じて魂が浄化されて行く。魂が浄化される事を通じて、人間の行動の質が高められる。その高め

られた心で企業管理する人には、良質な利益が最大限に齎される。それと拘わりをもった総ての人達に、物心両面の幸せを配分する事ができる。このとき企業経営と地域社会の健全な発展が、見事に調和する。其の魂の浄化の所謂生産母体は、ロータリー・クラブである。売買の根底にある人間関係の交流の実像を、体験的にも思索的にも己を磨きながら会得して、これを社会に適応して行くためにロータリー運動があるんだよ」と言うのであります。

シェルドンは 1921 年に、この標語の境地に合わせるため、今までの“Service,Not self” に替えて、“Service above self” を提唱し、やがて彼の思想は 1923 年セントルイスの国際大会において採択された決議 23-34 号第 1 項に、実を結ぶ事になります。

3）その他の原理の提唱

しかしここで注意しなければならないことは、シェルドンの立場だけが、ロータリーの本質を理解する唯一つの道ではなかったと言う事であります。

ロータリー思想の他の一つの流れは、1911 年、ミネアポリス・ロータリー・クラブの初代会長フランク・コリンズ (Frank B.CoIlins) の提唱した “Service, Not self” という優れた宗教的な思想であります。即ちロータリーの奉仕は、自己を否定する精神世界のみを、ロータリーの奉仕の理念と考えたのであります。自分を犠牲にして、この宇宙を支配する神の世界の秩序体系の中に、一(いち)人間が帰依することをもって奉仕だと考えました。これは中世キリスト教神学の思想に由来するものでありまして、非常に宗教的な色彩が強いものであります。米山先生はこの考え方に基づき行動されました。

1912 年の国際ロータリー・クラブ連合会初代会長グレン C ミード、1913 年の会長ラッセル F グライナー、1915 年のドクター、アレンアルバート、ガイ・ガンディカー等初期ロータリーの指導者は、殆どこの考え方を採っておりました。

商人は常日頃の商取引の場において、利己と利他とが調和する間は良いが、もし仮に極限状況になって、利己を取って利他を捨てるべきか、それとも利他を取って利己を捨てるべきかの二者択一の状況に立たされたとき、ロータリアンたるものは須らく後者を選択すべきであると言うのであります。この主張を 1911 年

の全米ロータリークラブ連合会の大会で、彼はこの境地をロータリーの本質なりとしまして、これを「Service, Not Self」(自己滅却の奉仕)と呼びました。

この立場を取りますとロータリーの本質は宗教と同一である事になり、これに対してシェルドンのような立場を、実業倫理主義と呼ぶのであります。

第三に、素朴で善意のロータリアンは、難しい理論よりも、善意や思いやりをもってする他者に対する暖かい行動の方が、遥かに「世の為、人の為」になると考えておりました。

以上三つの他に、第四の立場は、原理と実践との調和を大切にすべきであると言うものであります。1914 年の国際ロータリー・クラブ連合会会長でありましたフランク・マルフォランド（Frank・Mulholland）は、シェルドン一派の考えはロータリー思想の社会改良を主張するあまり、地域社会の弱者救済に比較的冷淡であること。高度の理論に酔いしれて、実践行動に移す事をなおざりにする傾向があることの批判的立場から、地域社会においては、例会で体得した奉仕の心を以て実践に励むと言う思考形式を一歩進めて、 むしろ、 特定の実践を基準にして、その原因をなす自己の境地の正当性を検証すべきである、とする立場を提唱をしました。ちょうど王陽明の説く「知行合一」と同じ立場であります。

この動きに対してシェルドン一派は、奉仕の心をロータリー運動の主たる目的と考えるとき、弱者救済の行為はあくまで付随的効果でしかない。また弱者救済の分野にあっては、その目的に沿った専門事業団体があり、ロータリー・クラブは側面から援助すべきであって、自ら前面に出て責任を負うべきではない。ロータリアンの義務は、あくまで個人個人によって行われるのを常道とするもので、クラブが団体行動を行う事は慎むべきであり、これをもってロータリー憲章と信ずるは、正に理論の歪曲と言わねばならないと反論致しました。

このような理論整然足る攻撃を受けて、素朴な善意論者はただただ戸惑うばかり、心の中に強い怨念が残ることは明らかであります。

4）問題の最終的決着―――「奉仕の実践に関する決議 23-34 号」

以上のようにロータリーの奉仕とは何ぞやと言うことについて、ロータリーを愛する人々が集まった正統派と実践派が対立しまして、分裂も招きかねない葛藤

がありました。事態の赴くところ、いずれかに決着を付けねばならなくなる事は必定でありまして、この事態を迎えたのが 1923 年の事、ロータリー運動の本質は何か、ありとあらゆる思想の対立を調和させようと言うことで、原理と実践を体系的にまとめ上げ、ミズリー州のセントルイスで開催された国際大会において、第 34 号議案として提起されたのでございます。

この案を起草したのは、時のシカゴ・クラブ会長ウィリアム・ウエストバーグ（William　Westberg）とテネシー州、ナッシュビルロータリー・クラブの会員ウィリアム・メイニアー・ジュニアー（Wilham Manier Jr）でありました。(メイニアー・ジュニアーは 1936 年に国際ロータリー会長に選ばれました)。故にこの決議を「1923 年の決議第 34 号」と呼ぶようになりまして「奉仕の実践に関する決議第 34 号」なのでございます。決議の冒頭に「一人一人のロータリアンが千差万別の社会生活において、奉仕の心を実践に移すことを言う」と記されておりまして、言い換えれば、この社会奉仕と言う概念は、今日のクラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の総てを包括して、各ロータリアンの行動の面から捕らえようとする表現方法であることが分かります。

この決議 34 号は、これまでの議論を集約して、原理と実践の調和の立場から、明快に解決を付けた理論的集大成でありまして、これを見ますとロータリー運動は誠に高尚な文化性を備えた原理運動である事が自ずから明らかであろうと思うのであります。

今日、どのロータリー・クラブにおきましても現実の実践課題に直面して、「ハテ、ロータリーは一体何ぞや」と問う時に、必ずや、単純明快に原理についての解答を与えてくれるのは、この決議 23-34 号なのであります。

その後 1927 年に至り、国際ロータリー理事会は、決議 34 号によって我々は原理と実践との調和の原則を開発した。これからのロータリーは、既に原理を把握した以上は実践の世界に入って行こうと言う提唱となって、総合企画委員会制度を設けて、此のとき奉仕の 4 分類法、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕を各クラブの事業計画に取り込み、それを管理する委員会を作りました。

1960 年になりますと国家と国家との対立とは異なる地球上の全人類の貧富の格差の対立が起こり、これに対する問題の自覚がなされまして、1968 年「世界社会奉仕」と言う新しい概念ができて、ロータリーの思想はここに完成を見たのであります。

このようにしてロータリーは、1923年に原理のロータリーを踏まえて、さらに実践のロータリーへと一歩踏み出し、以来88年の歳月を閲して今日に至っているのであります。

まとめ

こうしてロータリー運動が今日の発展を迎えた原動力は、先輩ロータリアンが優れた原理を開発し、それを遵守したからであり、ロータリー哲学を根底においたクラブであったからであります。最近のロータリアンは、ロータリー・クラブにいながらロータリーの基本的な哲学を理解しようとしないし、またその機会も少ない。

日本のロータリーは、昭和7年ぐらいから昭和12、3年迄での間、軍閥の弾圧を受けました。其の理由はロータリーはアメリカに本部のあるスパイの手先だとか、或いはフリーメーソンの隠れみのだと言って所轄の弾圧を受けた。

結局昭和15年8月8日に静岡ロータリー・クラブが真っ先に解散、8月12日大阪クラブ、19日岡山クラブ、21日京都クラブ、そして9月5日神戸クラブ、9月11日には東京ロータリー・クラブが解散した。

解散に際し米山梅吉氏は「重い足を引きずって私は今この壇上に立つ。こんな辛い気持ちで皆様に語らねばならないのは、20年来初めてである。私はただ、かかる結末になったことをお詫びしたい。創立以来20年を顧みるとき、誠に感無量である。この間、ロータリー・クラブが、いかに国家に貢献したか、其の歴史は燦然と輝いている。私はただ皆様にお礼を申し上げ、自分の不行き届きをお詫びしたい」と言ってその壇上から降りられた。これが日本のロータリーが、軍閥の弾圧によって壊滅した最後の姿だったのであります。

が、このようにして潰された組織、ロータリー・クラブと言えない状態になった時でも、戦前のロータリアンはその活動をやめなかった。9月5日に神戸ロータリー・クラブは解散した。その次の9月12日に神戸木曜会と名を変えて、同じ例会をやった。大阪は金曜会、東京は東京水曜会、札幌は職能協会、福岡は清く和すると書いて福岡清和会などと名前を変えながら、29のクラブがその運動を続づけた。このうち17のクラブが、昭和24年国際ロータリーに復帰するまで引きつづき例会を開催していたという。

なぜ解散させられたのかと言う理由を考えますると、これはただ事では無いのであります。例会は必ず特高警察の監視する中で続けられた。ひとつ間違えば、憲兵隊にしょっ引かれる恐れは十分ある訳で、身の危険を顧みず、ロータリーの伝統を守って行ったのであります。

そこまで彼らを燃えあがらせたのは何か。それは、当時の会員はロータリーと言うものは単なる組織だけではなく、崇高な思想として理解していたからであります。ロータリーを地域社会の職業人の切磋琢磨を通じて、ロータリアン各自の経営観の質を高めようとする、個人倫理を中心とする一つの思想開発の世界として理解し、これが確信にまで高められていたのであります。クラブという制度は壊滅したが、ロータリー運動を捨てる気にはなれなかった。やがて神戸は戦災で丸焼けになる。例会場のオリエンタルホテルも壊滅します。例会場は同和火災のビルの地下室に移る。昼でも停電で暗く、例会場にはローソクの炎が揺らめいている。食料がない。皆弁当持参で例会を続けたと言う。神戸木曜会は戦後昭和 24 年に国際ロータリーに復帰するまで、一度も例会を休まなかったと直木太一郎著“我らのつどい” に記されております。(p93)

今日のロータリーはこのような状態におかれたとき、手弁当で官憲の弾圧も恐れず、まさに隠れキリシタンの様にロータリー運動を続ける人間が一体何人居るでしょうか。あの当時 48 クラブ、(外地 11 クラブ、内地 37 クラブ)ロータリアン数 2142 名、今から考えると本当に少ない。しかしその少ない数の人達は素晴らしかったと思います。

そのエネルギーがやがて昭和 24 年(1949 年)に国際ロータリーに復帰したとき、その戦前の人達の優秀な思想は、また戦後のロータリーの拡大に繋がって行く。従って戦後のロータリーの拡大のエネルギーの源泉は、戦前のロータリアンの思想にあるということを忘れてはならないと思います。 戦前のロータリー20 年間の歴史観、これが所謂日本ロータリー史の中核でありまして、その延長線上に戦後のロータリーがあると考えるのが正しかろうと思います。ロータリーはやはり思想があっての制度であります。

規定審議会には、多種多様な提案があります。ロータリーを高める提案もあれば、ロータリーの本質を覆すような議案もあります。ここにロータリー運動の歴史の流れを見取ることが出来るのであります。

今ロータリーの悲観論が蠢いております。私は、ロータリーを高める道は二つ

あると思います。一つは、ロータリーの本質にある制度を再確認し、それを確立することであります。即ち一業一会員制、並びに例会出席であります。この二つはロータリーの核になる原則で、この二つのどちらかでも欠けたなら、それはもうロータリーとは言えなくなります。

「ロータリー・モザイク」を記したハロルド・トーマスは、1970 年代の章の冒頭に「我々多くの者は憂慮に耐えないのであるが、ロータリーがその上に樹立されて今日の力と安定にまで築き上げられたその基本的特質の二つが、次第に希薄に、さらに、より希薄にされる方向に向かう傾向がある。この二つとは、会員制度における職業分類の原則と、もう一つは例会への規則的出席である」(p319)と記しました。現今、正にハロルド・トーマスが 1970 年代に予測していた様に、その原則が守られなくなった。今、大事な局面であります。

今一つは、その確立された制度の中で、ロータリアンが只管心を磨くことであります。集会に参加するときは、この機会を利用して、自分以外のロータリアンを我が師と仰いで、只管自分の心を磨きなさい。集会に出たら、其の磨かれた心を、個人的に実践する努力をしなさい。これを二分類法と申します。しかし人間は神様ではないから、過ちもあるかもしれない。そこで反省して、また一週間経ったら例会で心を磨く。これを繰り返しながら人間の心の境地が螺旋の状態をもって上って行く、これを spiral theory と申します。ロータリー運動が存続する限り、この基本構造はなくならないのであります。

我々の先輩は哲学を開発しました。 しかし最近は、 哲学を追わなくなりました。哲学を追わなくなりますと、人間は、方向性を失った魚のように、何処へ行くのか分からない。一向（ひたすら）現象について動いて行かざるを得なくなります。現象を追う様になりますと一人では駄目だから皆寄せ集め、ポリオプラス、3H プログラム等の団体奉仕に走る。これは悪いと言うのではありません。一つの事例としては誠によいのですが、ロータリーとして、これに絶対的な価値を認めてはならないと思います。

ロータリーは何時も新たなる発想のもとに、その時代の流れに相応しい活動をしなければ、時代と共に生きるロータリーとは言えないのでありますが、いくら時代が変わろうとも、実践を起さしむる基になる考え方は、一つでなければならない。変わるのはただこれらの原理を、現在の情勢と時代の必要に応じる為の実際の適用面だけであります。

時代がどんなに変わっても、その人間の腹構えを教えてくれるのは哲学であり思想であります。どんなに社会が変わっても、変わってならないものをじっと持って、それで社会のリーダーシップを発揮しよう。自分の腹構えが同じで、その腹構えがあるからこそ、渾々と新しい発想が湧き出てくる。そういうものを持つから、千変万化な社会状況の中で、自分の企業を自由競争の場に於いて、何時も勝利の方に導いて行く事が出来る。そういう管理者たるもの「知性」が出てくるのじゃないかと思うんであります。庶民の哲学、市民の哲学と言われるロータリーから、こういう腹構えを学ぶのであります。私共は、自分にとってロータリーとは何か、何ゆえロータリーに入り、会員であるのか…を時に静かに、虚心に考えてみる必要があると思います。その為にも私達は常に、かつて我々ロータリーの先輩がロータリーを通じて開発した良質な思想を、そしてその心を汲み取りながら、その延長線上に物事を考えて行く姿勢が大切と思います。

いやあれは昔のロータリー、俺たちは今に生きている。何時までも決議 23-34 号じゃ駄目だよと言う人も出て来ました。そんなに相手に対して則を変えて行ったら、自分の二度とない人生を管理する自分の内なる心の良質は、一体どこにあるのでしょうか。しかも社会の指導者と言うものは、自分一人で生きてないんです。必ず同業者、従業員がおる。そういう人達の、幸せ不幸せを直接間接自分の思考で守って行く。そういう責任感を考えたら、この辺の事を今少し褌を締め直してかからねばと思うんであります。

これが確信がないばかりに、ロータリー精神の希薄化、クラブ例会のマンネリ化、ひいては I serve なのか We serve なのか分からなくなる。ロータリーの実践と申しますものは、根本的には個人奉仕なのであります。「昔は個人奉仕だったんだけれど、世の中が変わっちゃってね、最近は団体奉仕をと国際ロータリーが言うのよ」と言う指導者がよくおります。これは何とか正しいところに軌道を戻さなくてはならない。

ロータリー運動の中心は、制度的にはロータリー・クラブであります。さらにその中心はロータリアンであります。例会その他の会合の中で、他のロータリアンから色々と学び、自らを高めていこうという意欲をもって、そのロータリアンが自分の心の中に宿る良質な奉仕の原理を心の中に入れる。それをもって自分の管理者的な能力を通じて、社会管理の手法の中に管理者的手法を入れて、広く世の為人の為に行動しょう、とする運動のことを、ロータリー運動と言うのであり

ます。

日本のロータリーの生みの親であります米山さんは、「ロータリー・クラブは正確な意味における奉仕クラブとは言い難い。なぜなら、クラブの名前をもって奉仕することは例外で、唯会員の自覚を促す為に行うのだ」と申しました。ロータリーが奉仕するのではありません。飽くまでロータリーと言う組織の中にある一つ一つの細胞でありますロータリアンが、個々に与えられた職業、即ち専門職の分野でロータリーの心の実践をしていくんだ、と言う事を忘れてはならない事であります。

今一つ、ロータリーと言うのは社交クラブなのであります。制度化された社会の中で、ロータリー・クラブと呼ばれる社会を、国家であるとか、自治体であるとかと混同して考える人が、余りにも多いのでございます。ロータリーは社会改良のエネルギーを放流するが故に、ロータリーはロータリーの dimension（次元、規模）において、社会改良のエネルギーを放流する。国家は国家の dimension において、社会管理のエネルギーを放流する。地方自治体は地方自治体の dimension において地域管理のエネルギーを放流する。この辺の事どもは、社会奉仕、国際奉仕を議論したりする時に、ロータリーは時に大変な過ちを犯す処でございます。国家、地方自治体、ロータリー各々の考え方をゴッチャにして物事を考えるから、この点は特に注意しなければならない事で、我々は飽くまでロータリーの dimension に措いてのみ、一つの機能を果たすのだと言うことをよく認識しなければなりません。社交クラブとしての固有な機能、それは、飽くまで職業を離れた暇の活用なのであります。本職と離れたところで、そういうエネルギーを活用しようとする動きであって、ロータリー・クラブがどんなに進化致しましても、地方自治体になったり、国家の機能を代替するものではありません。ロータリーは自らの可能性の範囲で、社会的又は世界的な問題の為に行動するのでございます。しかしロータリー独自の社会改良の行動の分野は、茫洋として広がっております。

戦前のロータリアンの非常に偉いところは、ロータリーの姿を思想の次元に於いて捉えました。思想が一人一人のロータリアンの魂の中に宿って、クラブはそれを媒介する以外の何物でもなかった訳です。従って国際ロータリーは、単なる連絡調整機関でありました。

1992 年の規定審議会では、社会奉仕に関する新声明として、決議 92-286 が採

択されました。これは個人奉仕と共にクラブの団体奉仕を推奨し、更に国際ロータリーが積極的に奉仕の実践例を提案することが明記されております。国際ロータリーの権限を強め、徐徐ではあるがロータリー運動を団体奉仕が可能な方向に軌道修正しつつあることが伺われます。

ロータリーは良質な思想をもっております。良質な思想は人を説得致します。人を説得致します良質な思想は、武力を使わない一つの社会的な力になります。チャールズＣ・ケラー国際ロータリー会長は、「兵器を使う事なくして、恒久的平和を見つけることが唯一の至上命令であるという時代が来た」と述べられました。政治の力とロータリーの良質な原理思想の力とは、其の社会的機能としての本質、対応が異なります。ロータリーの奉仕哲学の理論から国家を越えた奉仕の実践を行う。武力を使わないある種のクールな力を地球上に蔓延させて、恒久的な平和と繁栄をもたらす事が出来るのだということを我々は強く信じて、活動して参りたいと思います。

その使命はロータリアン一人一人に課せられている。その思想は何処で出来るのか、例会出席で作られる。そんなロータリーに蘇ることが出来ますれば、ロータリーは 21 世紀に向かって大きく開けて行くものと確信致します。

ご清聴感謝致します。

ロータリーあれこれ

齊　藤　　博

その１．米山梅吉氏と東京クラブについて

米山梅吉翁は慶応四年（1868 年＝明治元年）二月四日に東京芝田村町（港区新橋四丁目）で大和の国、高取藩主（壷坂寺のある処）植村家の家中、和田竹造の三男として生まれました。母は “うた” と申しまして、伊豆三島神宮の宮司、日比谷氏の娘で、五歳の時父が死去した為、明治五年には一家は母の実家である三島に身を寄せまして、懇望されて三島の旧家、米山家の養子となられました。

沼津中学校に入学したのですが、途中家出して上京し、銀座江南学校へ、次いで青山学院大学の前身の東京英和学校に学びながら、渡米の準備のため福音会英語学校で英会話の指導を受けました。

明治二十年の春渡米し、オハイオ州ウェスレアン大学に学び、八年間のアメリカ留学、帰国後三井銀行に入社、その後は、三井の発展と一生を共にする訳であります。

米山さんは自分の家計には厳しく「一汁一菜主義」を以てしながら、その収入の殆どを社会事業に使った。将来有為の若者が、経済的理由で進学半ばにして挫折しそうな事を知ると、自分の名も告げずに学資援助をした例が、幾つか記録に残っております。

1917 年（大正六年）に、日本はアメリカに目賀田（めがた）男爵を団長とする財政問題調査団を派遣しました。当時三井銀行の重役だった米山梅吉氏もこれに随行しました。三井銀行の子会社がアメリカのテキサス州ダラスにありまして、社長として赴任していた福島喜三次氏は、ダラスロータリー・クラブの会員でありました。福島氏が専ら案内役を務め、その時米山氏は、始めて福島氏からロータリー運動の話を聞いたのです。

翌年福島氏は東京に転勤となり、ダラスのクラブは送別会を開いてくれました。その席上、日本にもロータリー・クラブを作るようとの激励を受けました。大正九年一月帰国、この年の三月に国際ロータリークラブ連合会の本部から、六月末までに日本にクラブを創立するよう、福島氏に委任状が届けられた。そこで福島氏は米山氏に相談して、創立準備に取り掛かったのですが、当時日本ではロータリーに対する関心が全くございませんで、期限切れとなってしまった。そこで期限延長を連合会本部に申し入れましたところ、福島氏の他に、パシフィック・メイル汽船会社の横浜支店長 William L,Johnson を共同特別代表に任命する条件づきで、申し入れを承認する旨の委任状が届いた。こうして William 氏は、国際ロータリーとの折衝、米山氏は人集め、福島氏は下働きと言う分担で、1920 年大正九年十月二十日に、丸の内の銀行クラブで、実力百万石の実業家、24 人が集まりまして、東京ロータリー・クラブ創立総会を開催、翌年四月国際ロータリーの認証を受けました。

初代会長米山梅吉氏、幹事福島喜三次氏と言う役割で発足、これが日本で初めてのロータリー・クラブ創立の出来事であります。その時のロータリー・クラブ国際連合会長はエスタス・スネディコール Estes Snedecor と言う方で、33 歳で国際ロータリーの会長となり、エジンバラの地区大会で、次のような演説をしております。

「我々は世界を一つにしようとするものではない。それぞれの国の、それぞれの家庭の中で、楽しく静かに生きることを望んでいる。常識と寛容と理解の精神で、ロータリーを世界に広げ、 それが出来た時に、 始めて世界平和が達成される」。中々含蓄あるメッセージであります。

逆上る三ヶ月前大正十年一月、米山氏の長男、東一郎さんが二十歳にて肺炎にて急逝されました。米山さんは「東一郎」と題する記念の冊子を作り、その序文に「春風常に吹き断えじと信じたる我が一家は、遽に暗黒の淵に沈めり。児の臨終、骨肉慟哭、その刹那の光景は髣髴して今なお眼前にあり。涙、とこしえに乾かず」と記しております。

続いて大正十五年、画家志望の次男駿二さんが、二十一歳で、余りにも慎ましい人生に失望して自殺、米山さんの生活は一層質素になりまして、逆比例して社会奉仕に一層の力を尽くしたという事でございます。

「新隠居論」を提唱され、五十五歳で三井銀行の役員を辞任し、財団法人三井

報恩会の理事長となりまして、延べ十年間の永きにわたり、青森県・西平内村の振興に捧げられた。これを知る人は殆どおりません。（米山梅吉、内山稔著）晩年は全財産を、緑が丘小学校に寄付し、自己犠牲の奉仕に徹したのでございます。

大変厳しい方であったようで或る例会のとき、会長として「次回の例会は祝祭日に当たるので休会にする」と米山氏が通告した所、出席会員から喜びの拍手が湧いた。それを見て、いきなり強い語調で、会員の方々を窘めたと言うことです。規則にも厳しかったようで、クラブの「一業一会員制」と言う会員構成を強調され、東京クラブでは長いこと、弁護士は一人であったそうです。

昭和二年頃の話ですが、米山先生は「最近お若いロータリアンは、ロータリーの本質を理解しておらん。ロータリーの例会は人生の道場である。道場に来るからには、それなりの腹構えをもって参加するのを至当とするのに、冗談を言ったり私語をしたりするのは何たる事であるか」と怒鳴られたロータリアンがいた。東京クラブの柏原孫左衛門、当時二十八歳。「ロータリーは親睦だよ、親睦は楽しくやらなければいけないよ」と、冗談を “かんらからから” とやったらしいんですね。これが米山先生の逆鱗に触れて、「最近お若い者はだらしがないっ」とやった。米山先生はロータリーの親睦は最も程度の高いもの、ロータリーの親睦は、親睦もって奉仕の心を作る場と心得られておられた訳ですから、諾べなるかなとも思われます。

少々横道にそれますが、 “奉仕の心” の事を英語に直すと ideal of srvice と申します。ロータリーの綱領にも「奉仕の理想を奨励しかつ育成し・・」とありまして、奉仕の理想と言う語は、ロータリーの基になっております。が、この理想というのは、時に誤解を招くもので御座いまして、日本語で理想と言うと、完全な状態、現実には到底到達する事の出来ない状態、と言うように考えられます。従って奉仕の理想とは遥かなる彼方であって、目標ではあるが、達成出来ないものと考えがちであります。そこでこの ideal という語には、観念という意味もあります。「理想」と言う語を「観念」と言う語に置き換えてみまするとと、物事に関する考え、砕いて言えば「奉仕の気持ち」であります。「気持ち、又は心」でありまするから、何も難しいことではありません。「他人の身になって考えて行動する」のが奉仕でありまして、思いやりの心が、奉仕となって現れるのでございます。逆に言葉と言うものは誠に難しいものであります。話を戻して、怒られた柏原孫左衛門、大変個性の強い人で “この野郎、米山の馬鹿爺” 。彼は満座の中で恥

をかかされた腹いせに、“自分の目の黒いうちに、米山の精神を流儀を、東京クラブの中から悉く排除して見せる” と誓うんであります。

この戦いは最初から勝負が決まっておりまして、なぜなら米山先生はお年寄り、どんなに偉い人でも柏原孫左衛門28歳ですから、28歳と53歳が喧嘩をすると、自然法の摂理によって100%年寄りが負けるんであります。

時を経て柏原孫左衛門もクラブの長老になりまして、彼の指導するロータリアン群によって東京クラブは、初期伝統のかなりのものをどぶに捨てて、米山先生の残されたものは殆ど消えてしまった。これは “東京ロータリー・クラブ 50 年のあゆみ” の中に、米山先生の精神を奨揚する文言は、殆どないんであります。日本のロータリーの始祖、戦前の日本のロータリーの大黒柱の米山先生が、弊衣の如く捨てられる。僅かに米山奨学会が残っています。

1915 年サンフランシスコで開かれた国際大会で議決されました 「ロータリー職業倫理訓」と言うものがありまして、アイオワ州スー・シティ・ロータリークラブが、二年の歳月をかけて起草したものでございます。ロータリーの職業観の宣言で、実際にどうしたら職業的生活の中で、ロータリー哲学である“利己と利他との調和”を実現させることが出来るかを、各会員の職業奉仕の実践を推進させる事の適切な原理を記したものでございまして、11 ヶ条に上る長文のものでございます。戦前の日本のロータリアンはこの倫理訓によって、ロータリー思想の理解の “縁（よすが)” としていたようであります。1928 年 12 月に、満州の大連に創立された大連ロータリー・クラブの会員で、日清製油大連支店長の古沢丈作氏が、この職業倫理訓を英文のままお経のように暗唱しているうちに、それが心の中で “さーっ” と氷解する。その気持ちを大事にして、彼は昭和 3 年大連クラブの「ロータリー宣言」を書きました。五ヶ条よりなるものでした。一方米山ガバナーは、このロータリー宣言を高く評価しておりまして、米山さんが三期ガバナーを勤めて昭和 5 年退任致します時に、地区大会で大連クラブの “ロータリー宣言” を奨揚しました。これでロータリー宣言を記した古沢丈作氏は、日本で著名なロータリアンになる。

古沢さんは、敗戦と共に東京に戻って来ました。名士ですから東京水曜会のメンバーになりまして、戦中、当局の弾圧によって解散させられた日本のロータリー・クラブは、戦後国際ロータリーに復帰、昭和 24 年に東京クラブの会員になりました。昭和 27 年に東京クラブの会長に選任されました時に、彼は「自分をロー

タリアンとして原理的に育て励まし、今日の自分を作ってくれたのは米山梅吉先生である。その恩人である米山先生は、昭和 21 年 4 月 28 日に前立腺癌で、沼津に於いてこの世を去られた。私を本当の社会人のリーダーに育ててくれたのはロータリー。ロータリーの中で米山先生の指導がなければ、自分は自信をもってこの大ロータリアンになれなかった。既に 6 年前にお亡くなりになった米山先生に対する恩に、何をもってして報いようぞ」と考えました。米山先生は東南アジアから来る留学生に、何くれとなく私財を投じて面倒を見ておられたので、クラブの会長に選出された訳ですから会長権限を使って、「東南アジアからの留学生の奨学事業を、ロータリーの制度の中に組み込んで、“東京ロータリー・クラブの中に、米山奨学会を作ろう”　と提案致しました。会長の提唱は誰も否定することは出来ませんので、昭和 28 年、東京クラブの中に米山基金が出来ました。

ところがこの米山基金の財源は、クラブの会員から醵金しなければなりません。瞬く間に財源は枯渇する。参ってしまった。そして今一つは、東京クラブに横溢する柏原孫左衛門を主とする反米山派の会員が居る訳で、米山的なものは消さなければならないと言っているうちに、クラブで金を集めるのは如何なものかな一と言う意見も出て来ました。議論するうちに、米山基金は全日本のロータリー・クラブの財産だと言うことになりまして、昭和 31 年全日本のロータリー・クラブの共同事業として、ロータリアンの醵金により運営すると言う形になり、下って昭和 42 年、「財団法人・米山記念奨学会」と言うものが出来ます。法人格を持たない東京クラブの米山基金よりは、社会的地位も強固になりまして、募金を多く集める事により、活動も活発になりました。

これ自体は良い事であることには間違いはないのですが、柏原孫左衛門の怨念からすれば、米山氏を称えるなんて事をクラブの外に追い出した事になるので、これは柏原対米山の戦いとしては、柏原の勝利と言う事が出来るんだろうと思います。

その次に柏原孫左衛門のやったことは、東京クラブに米山基金なるものを創設した古沢丈作の功績を、記録から抹殺する事であります。今東京クラブの資料室を色々当たってみても、大ロータリアン古沢丈作の伝記は時既に遅く、すべての資料は手にすることは出来ないのです。柏原氏の考え方の最大の誤りは、反・米山に執着するあまり、米山先生の功績は、東京クラブから消され失われてしまったと言う事であります。

しかし柏原孫左衛門と言う方は、戦中戦後のロータリー運動の一角を照らす大親分でありまして、昭和 22 年、日本のロータリー・クラブ群の国際ロータリー復帰を、組織的に推し進めようと言うことになりました。手島知健氏が復帰協議会会長となり、其のとき、復帰協議会の会計であった東京水曜会の柏原孫左衛門が、国際ロータリーを説得する一手立てとして、 昭和 15 年に国際ロータリーを離脱した後の日本各地の諸クラブが、現実にどのような活動をしているかの実態を調べる必要があるということで、当時の劣悪な国鉄の列車に乗り、北は北海道から南は九州に至るまで、各地の実態を其の目で調べて歩きました。その結果、約半数のクラブが、ロータリーの伝統を墨守していたという事実が明らかになりまして、此の調査報告書が国際ロータリーを動かして、国際ロータリー復帰の糸口になったのであります。この事実を知れば、彼の功績を認めなくては、日本のロータリーの歴史を語ることは出来ないのであります。

その 2. ロータリー・ソングの事

昭和 3 年、日本ロータリーが地区管理の時代に入りまして、第三代ガバナー・村田省蔵氏はロータリーの日本化を提唱しました。其の一つに、二宮尊徳の報徳教の教え、これはロータリーの職業奉仕の開発に繋がるもので、日本のロータリアンは「報徳教を学ぶべし」と推奨致しました。ロータリー・ソングも英語のものはやめて、日本語のロータリー・ソングを作ろうと言う機運が昭和 10 年の京都での第七回地区大会で出て参りました。そのときに「奉仕の理想」と言う歌が出来たんでありますが、実はこれの原動力は、遡る 5 年前、昭和 5 年に第二回の地区大会に、フランク・マルフォーランド Frank Mulholland が国際ロータリー会長代理でやって来まして、神戸のロータリアンに「ロータリーは飽くまで世界のロータリーであって、アメリカのロータリーではない。私はすべてがアメリカナイズされるのには反対だ。今英語でロータリー・ソングが歌われたが、何故日本語の歌を歌わないのかと問うたところ、日本語の歌では権威がないと言う事であった。そんな事では困る。私は各国におけるロータリー・クラブが、それぞれその国の風格、習慣によって行われる事を希望する」と言われたそうであります。そのことを村田さんは覚えていて、自分がガバナーになった時に、それを導入したという事らしいのです。

そこで「奉仕の理想」と言う歌ですが、実は京都クラブのメンバーでありました前田和一郎さんと言う方が、 地区大会の前年度の 12 月に村田ガバナーに呼ばれ、「来年の地区大会に日本語のロータリー・ソングを歌いたい。貴方に是非、歌詞を作ってもらいたい」旨告げられた。辞退したが懇願されて、やってみましょうと言うことになった。骨子は一番だけにしょう、出来るだけ簡単なものにしょうと言うことでこの「奉仕の理想」が出来たのです。ところがあの中で、一つ心残りは “みくにに捧げん我らの生業” の部分なのであります。

戦前京都クラブは真っ二つに割れて、天皇陛下が解散しろと言うんだから解散しようと言う考え方の国粋派と、いやロータリーと言うのは国際的な組織であるから、そんなことで解散してはならないと言う国際派、この二派が喧喧囂囂の議論をした。京都クラブは割れて、例会も別々に開いた。前田さんは、その時にこの国際派の旗頭でありました。 “みくにに捧げん” は “世界に捧げん” だったのであります。村田ガバナーが “みくにに捧げん” に変えてしまった。ここにも当時激しかった軍部の弾圧を避ける為の、一つの方法だったのだろうと思いますが・・。

そのことが分かったのは、昭和 40 年頃の話ですが、或るロータリアンが “みくにに捧げん” はおかしいのではと言い出した。これを聞いて川崎クラブの末長久さんが、前田さんの甥に当たる武田好弘（よしひろ）さんが兵庫県に居られることが分かったので、「前田さんの真意を聞きたいのでお目にかかりたいのだが」と武田さんに依頼した。すると暫くして、前田さんから直接末長さんに手紙が来た。原稿用紙 400 字づめで四枚に記されていたそうで、その手紙には「自分は戦後はロータリーに戻ることはなく過ごしている。なぜなら、あの解散直前に国際派と国粋派があんなに論議した仲なのに、戦後は何もなかったような顔をしている。あんな節操の無い連中とは二度と付き合いたくないからだ」と言って、再びロータリー・クラブに戻らなかった。結局寝たきり老人になって、ロータリーの友人もその後は誰も訪ねて来なくなった。そのとき貴方の手紙を戴いて非常に嬉しい。今は平和になったんだから “みくにに捧げん” これは元の通り “世界に捧げん” に直して欲しいしい」と書いてあったそうです。末長さんは、何とかしなければとは思いながらも、一（いち）ロータリアンではどうにも仕様がない。この手紙を受け取った一ヶ月後に、前田さんは、この世を去られた。前田さんの遺言の様にも思うわけで、作詞者の気持ち、これは “みくに” ではない “世界

に” であったと言うことであります。

その 3. 職業奉仕の事（付 四つのテスト）

職業奉仕と言う言葉は、1927 年に出てまいりました。1911 年にオレゴン州のポートランドで開かれた第二回全米大会に、アーサー・フレデリック・シェルドンは会議に自ら出席することが出来なかったので、シカゴのロータリアンにメッセージを託し、これが大会で読み上げられました。

「経営の科学とは、奉仕の科学のことを言う。即ち、奉仕に徹するものに最大の利益あり。He Profits Most Who Serves Best」

先に少々解説申しますと、He Profits を 1 なる数値にする Serves の世界を 1 なるものと考える。経営者の心の状態が数値で 1 しかないと考える。そうすると、心が 1 であるから自分の行動も 1 の制約を受けるから、その 1 なる力で、いくらあくせく行動しても、得られる利益は 1 しか得られない。心の中の質を 2 に良質化する。そうすると、不思議と 1 だった行動の主体 He Profits が、2 になる。2 の思考で会社管理をやった人は、最後に結末として自分の取り分は 2 とならざるを得ないじゃないか。精神機能というものを根底において、・精神機能を良質化することを通じて、その心で実業に勤（いそ）しめば、その精神機能の改善の部分だけ、利潤が上がってくる。こういう考え方であります。

従って職業奉仕とはどういう事かご理解を戴ける訳で、職業奉仕とは二層構造をもっておりまして、一つは企業管理です。仕入れて売る、それだけでは駄目だ。それをマネージする自分の心を、対人間的に浄化して行く。この努力を失うと破滅する事があるぞ、と言うことであります。

シェルドンは続けて「如何なる制度であっても、事の成否は一（いつ）にかかって、奉仕の実践者の総和如何による。広い意味において、人は皆セールスマン、即ち一人一人それが労働か又は商品であるかの別だけの事で、他者に対して売るべきものを皆持っている。人生の成功は、単なる幸運や偶然性のお陰によるものでなくて、自然の法、即ち、精神的、倫理的、身体的及び法の支配に服するもので、これらの法の命ずるところに従って行動を行えば、至上の成功をかち得ること必定である。天地の理法、森羅万象の背後に普遍的思想がある事の認識を深くすると言うことは、人類連帯の自覚、万物帰一、人類皆同胞の自覚の事であって、

この次元に立てば、企業の場であると否とに拘わりなく、“奉仕に徹するものに最大の利益あり” と言う事の本体を会得する事が出来るのである」と読み上げました。

シェルドンのものの考え方というのは、要するに “人間の体に魂がある。魂は浄化される事を通じて、人間の行動の質を高めて行く。その行動の中に企業経営が含まれる訳でありますが、単なる利潤獲得の目的の為に企業経営をしてはならない。魂の浄化によって支えられた範囲内において、企業を管理し、相互契約によって金銭が、授受される訳であるが、その金銭の中に「浄化された魂の投下」と言うものがなければいけない。金（かね）金金に流れる人生には、地獄がある。必ず魂の浄化を企業に移して、企業管理を行うのだ” と言うのであります。

経営者は自分の人格を形成し、企業の経営を “奉仕の心” で運営することで、更に昇華して道徳基準を高めて行く。そうして職業を通じて社会に奉仕する。職業倫理の高揚、これが、職業奉仕の意味するところであります。こういう訳で、職業奉仕は単純明快、決して分かりにくいものではありません。

「ロータリーが職業倫理をやかましく言うのは分かるが、この競争の激しい経済界で、そんな奇麗事で事業が出来るだろうか」と思われる方もおられると思います。これに対しては「四つのテスト」と言う、ロータリアンなら誰でも知っている標語がございます。

1、真実かどうか 2、みんなに公平か 3、好意と友情を深めるか 4、みんなのためになるかどうか

ここで言うみんなとは、広く社会を指しております。これこそ事業成功の秘訣でありまして、実証されたものなのでございます。作者はハーバート・テイラーですが、1932 年アメリカの経済パニックの中にあって、或るアルミニュウム食器の製造会社が倒産寸前の会社を債権者の依頼を受けて、この会社の再建に取り組むこととなりました。このどん底状態から抜け出すためには、全社員が極めて倫理的な立場をとることと同時に、社長と社員の心が同一になるような管理運営出来れば、この再建は旨く運ぶと考えました。そこで彼は六週間、沈思黙考の末編み出したのが、この「四つのテスト」であります。その結果当初 6000 ドルあった借入金も、10 年後には全額返済、株主には 100 ドルの配当も出せるようになりました。

その後 1954 年テーラーが国際ロータリー会長に就任したとき、職業人の行動

規範にもなるものと考え、これを国際ロータリーの標語として版権を委譲しました。これが契機となってロータリーの世界に浸透していったのであります。勿論これは会社経営ばかりでなく、我々の日常生活にも適応されるので、ロータリー運動の理念に良く盛り込まれているとして、過去 50 有余年、 奉仕の心を植え付け育てるのに用いられて来ました。が、これは国際大会の承認を得ていない、飽くまでも、個人の提唱するターゲットと同じであります。(1943 年 RI 理事会は採用を決定)

そして総てのロータリーの思想と同一であるかどうかと言うことに付いては、些か問題がある。ロータリーの一部を示すものであって、全部を示すものではないのであります。

如何なる場合に適応するかというと、同一社会の人の和を得る為には非常に良い。同じ性質の社会、例えば会社のよう全員が利潤を追求する社会、こういう場合には最も適切であります。しかし異質の社会の人の和を繋げる事は出来ない。

具体的内容に付いて考えますと四つのテストを二つに分けて考える。一つは 1、真実かどうか。今一つは 2〜4 であって 1、が言動そのものの内容、2〜4 はその言動が述べられるべき状況に関して、類別する基準が示されている。ロータリアンの言動は必ず真実で無ければならない。真実の上にのみ、人と人との信頼関係が成り立つ。しかし真実の言動のうち、これを実行するか否かは、2 から 4 の基準により分類検討を加えた上で、行われなくてはならない。即ち 1、はロータリアンの言動は真実かどうか。2〜4 は真実を語ることが、皆の公平になるかどうか。真実を語ることによって、人間関係が損なわれる場合は、真実を語らない方が良いと言う訳です。

例えばここに胃癌の患者さんがおられたとする。この場合 2〜4 の準則の命ずるところによって、「貴方は癌ですよ」とは言わないでしょう。だがしかし、何も言わない事が相手に不吉な予感を与え、「何も教えてくれないようですが、私は癌ではないのですか」と訊ねられたときに、一体どう対応すべきか。「いいえあなたは癌ではありません。ごく普通の病気ですよ」と言えば真実に反することになる。死に赴く人の姿に対して、生者の精神衛生を管理する世界、この世界は異質の世界でありまして、「四つのテスト」によって人の和を作ることは出来ないのであります。

いま一つ、職業奉仕は、職業を通じて社会に貢献することだと、手続要覧のは

書いてありますが、言葉だけに飛びつきましては非常に危険であります。例えば弁護士が無料奉仕相談を企画する、医者が無医村に行って診療行為をやる。これは職業を通じて社会を潤している訳ですが、職業奉仕かと言うと、これは実は社会奉仕であります。そこで、職業奉仕と社会奉仕を分ける基準はどこかと言うと、それは受益者、その奉仕の実践によって利益を受ける人が、ロータリアン以外の人の場合は社会奉仕、ロータリアンが受益者になる場合、これを職業奉仕と言うのです。

もともと職業奉仕と言うのはクラブでいろんな発想を交換し、そこで得たものを自分の企業に持ち帰って、企業繁栄の糧とした。と言う事は自分の企業が栄える事ですから、ロータリアン自信が受益者になる。それからロータリアン以外のもの、世の中の人達が利益になるもの、これが社会奉仕。従って或る一つの事が、職業奉仕になるのか、社会奉仕になるのか。その基準は、受益者は誰かと言うことをいつも考えておけば、宜しい訳であります。

そこで、クラブで職業奉仕委員会の事業計画として行われているところの、例えば優良従業員の表彰。これは職業奉仕委員会が企画立案しているクラブが多いのですが、優良従業員と言うのは、ロータリアン以外の人が表彰を受けて受益者になる訳ですから、これは原理的には社会奉仕委員会が管轄しなければならない。しかしロータリアンの受益は、全然ないかというと、そうでもない。例えばある社員が表彰を受けます。同僚も奮起すると、企業の実績も上がってくる。企業が繁栄すれば受益者となるのは、ロータリアン自身であります。従って正確に申しますと、優良従業員の表彰と言うのは職業奉仕 20%、社会奉仕 80%である。それでは社会奉仕委員会が管轄するのは間違っているかと言うと、それはどちらでも良いが、原理的に頭の中で整理する時には、受益者がロータリアン以外の人ならばそれは社会奉仕、ロータリアン自身が受益者になるのは、職業奉仕となるんだと言うふうに分けていけば、よいと思います。

如何でしたでしょうか、これで本日の話は終わります。

履　　歴

齊　藤　　博

生年月日	昭和４年５月 11 日	
現住所	千葉県市原市五井 2770 番地	
学　　歴	昭和２２年３月	千葉県立千葉中学校卒業
	昭和２９年３月	昭和医科大学医学部卒業
職　　歴	昭和３０年５月	千葉大学医学部眼科学教室入局
	昭和３０年６月	第 18 回医師国家試験合格 医籍　第 155811 号 昭和３０年７月２６日登録
	昭和３５年３月	医学博士の称号を受く
	昭和３５年８月	眼科齊藤医院を継承
	平成４年１２月	医療法人社団博仁会理事長就任
公職歴	昭和４４～５３年	市原市医師会理事
	昭和５３～５７年	千葉県医師会理事
	現　　在	千葉県眼科医会裁定委員 千葉県医業健康保険組合顧問 市原バレーボール協会会長
ロータリー歴	昭和４３年１月	市原ロータリー・クラブ入会
	昭和４６～４７年	同クラブ幹事
	昭和５１～５５年	地区ロータリー財団委員会委員 ～小委員長歴任
	昭和５５～５６年	市原ロータリー・クラブ会長
	昭和５６～５７年	地区職業奉仕委員会委員
	昭和５８～５９年	第三分区代理
	昭和６２～６３年 (1987 ～ 1988 年)	国際ロータリー第２７９地区ガバナー
	昭和６３年～	地区諮問委員会委員
	平成４年（1992 年）	規定審議会代表議員
	平成７年（1995 年）	規定審議会代表議員
	平成１１年７月	ロータリー文庫運営委員会委員長
	平成１５年７月	ロータリー文庫運営委員会相談役
	昭和５３年	ポールハリス・フェロー
	昭和５６年	米山功労者
	平成６年（1994 年）	マルチプルポールハリス・フェロー
賞　　罰	平成１３年２月	学校保健教育功労賞 （千葉県教育委員会）